

空き家

## 空き家 1

---

廃墟となった夜の病院に俺達3人の足あとしか響かない

俺「誰かいませんか～」

その声が病院に響き渡る。俺の他にBとCがいるがそいつらも小さく話しているがその小さな声でも結構響く。

廃墟となっている病院というのは何だかとても不気味なものだ。もう使われていない小物やら器具などが部屋にまだ残っている。

俺「やっぱ出ないかぁ」

B「つまんねえ」

C「帰ろうよお」

俺達は廃墟を探検しているわけでは無い。たまにこうやっては幽霊スポットを回って冒険しているのだが  
今だに幽霊というのに出会った事が無い。

ここで自己紹介をしよう。俺（A）はこの心霊探検を考えたやつでBは俺の友達である。そして、CはBの彼女。

こうやって心霊スポットなどを回り遊んでいるのだ。

俺「何か他に面白い所無いのかよ」

B「やっぱ心霊スポットなんて怖いと思うから見えない物も見えちゃうだけの所だろう」

C「あたしは怖いよ・・・心霊スポットなんて・・・」

俺とBは好きに楽しんでいるのだが、Cはどうも幽霊とかホラーは苦手みたいだ。

俺「今日はもうお開きにしようか」

二人とも頷いて車に乗り込んだ。その帰り道に次の心霊スポットの話になっていた

B「次はどこに行こうか？」

俺「そうだなあ心霊スポットと言っても限られてくるからなあ」

C「今日の所も怖かったよ」

帰りの車の中で今日の病棟の話をしながら帰りながらBとCの家に送る事にした。

俺は帰りの車の中で「早く何か起きないかな～」とそんな事を思いながら、これから起こる恐怖を知らなかった。

次の日、Bが新しい心霊スポットを見つけてきた。

B「車で1時間くらいだけど今は空き家なんだけどさ、住んだ人は1ヶ月以内に出ていくんだ。その理由が出るんだって。霊がさ」

俺「またこういう系かあ～」

C「また行くの？」

その家というのはどうも、ある家族が住んでいたがその母親が自殺してしまい、その家族は引っ越してしまった。それ以来そこに住んだ家族はすぐに引っ越してしまい、引っ越す理由は「あの家には霊がいる」と言い残した引っ越してしまった。

その家に行く為に、BとCが家を見たいと言い家の鍵を借りるという作戦になった。そうと決めたら車で1時間かけてその家に向かった。

## 空き家2

---

その行く道にBが今回の心霊スポットの説明みたいなのをした。

B「今回のスポットは一軒家みたいで二階建てとなっている一回はリビングと居間になっていて2階は寝室が2つある」

C「家族が住んでいたって事は結構広いのね？」

B「そうだね」

車でワイワイしながらその家に向かいながら俺は変な胸騒ぎを覚えていた。何か嫌な胸騒ぎ。今までこんな胸騒ぎを感じた事が無い。

俺はBが用意した地図を見ながら目的の家までに向かっていった。家の周辺に近づくと胸騒ぎが増えてくる。

俺「何だろうなあこの胸騒ぎ」

B「胸騒ぎ？おいおいお前がどうした？」

俺「嫌な予感しかしないんだよなあ」

B「おいおいビビるなよ」

俺「ビビってねえよ」

B「胸騒ぎというより好奇心じゃね？ワクワクしてるという感じだろう」

俺「そうだな」

俺達はまた楽しくその家に向かう事にした。Bの言ってくれた言葉のお陰だろうか？それとも胸騒ぎは好奇心だと自分で思い込んでしまったからだろうか

真っ直ぐ目的の家に向かった。

家に着くとまだ家自体は新しい。この家が安く売られているならかなりの魅力の物件だ。なのに住んだ人はすぐに出ていってしまう。

そんな不思議な物件へと目の前にして皆ワクワクしていた。

Cも廃墟などではなく、また今はまだ3時頃という事もあり回りも明るいので怖くは無いみたいだ。

B「じゃ、さっそく入るぞ。中は暗くなってるから懐中電灯を付けて歩くからな」

俺「おう」

C「うん」

ガチャ

扉を開け中に入った俺達はまず懐中電灯を付けた。

俺「回りが真っ暗で何も見えねえ」

C「そうだね、お昼だというのに不気味」

B「まず左側がリビングだな、そこの扉を開いてみるよ」

Bが指差す方には扉がありそこを開くとキッチンとテーブルがまだ残っていた。

俺「家具なんかはまだ残ってるんだな」

B「最後に出て行った人が家具などを置いて出て行ったんだとよ。」

その家具はほこりっぽく綺麗にすればまだ使えそうなのに、何故置いていったのか？

C「にしても広いリビングねえ。これで安いなんてオカシイわぁ」

確かにCの言うとおりである。このリビングでまだ家も新しい。なのにあの値段は変だ。

B「よし、向かいの部屋に行くぞ」

Bはそうやって扉を開き向こうの部屋に行ってしまった。Cもその後に付いていく。俺も行こうとすると

階段の方で気配を感じた。その先に視線を向けても誰もいない。

俺「おいB、俺、先に2階見てくるわぁ」

B「なんだよ気が早いなぁ。おいA、奥の部屋は自殺した部屋だから気を付けろよ」

A「そんなんでビビるかよ」

俺は階段の方へ足に向け階段を登っていく、この時に俺はおかしかったかも知れない。普段なら単独行動なんてありえない。それなのに何故か

あの日だけは好奇心という言葉だけでは説明出来ない何か別なものがあつたのかも知れない。

階段を登るとギシギリと音が鳴る。そしてだんだん空気が湿っぽくなっていき気持ち悪い気分になった。

2階に着くと懐中電灯を照らし確認をした。右と正面と左の3つドアがあり、左が自殺したドアだとBが言ってたな。部屋の中にはBとCが来てから確認したら良いだろうと思い階段を下りようとして階段の方へ体を向けたその時。

ギシギシ

ギシギシ

な・・・なんだ

ギシギシ

ギシギシ

俺はてっきりBとCが階段から上がってくる音なのかなと思ったけれど。。。違う！これはBとCの足音じゃない！

俺の右側から歩いてきている！

階段を降りたいという気持ちで一杯なのだが、その時にはもう体が動かなくなっていた。

せめて目だけでも閉じるんだ！俺は精一杯目を開けないようにしていた。

ギシギシ

ギシギシ

その足音はもうすぐ俺の真横にいるのが解った。

フー フー

吐息まで聞こえる。しかし、その吐息というのはとても冷たいものだった。そうこの世の者じゃない。俺は恐怖を覚えた

それは俺の回りをグルグル回っているようだ。

ダメだ！絶対目を開けるな！

そう思っていると吐息が耳元にきた。何かを囁いている

「イッシャイ、イッシャイ、イッシャイ、イッシャイ」

俺は叫びそうになった。女の子声だ！。俺は心の中で叫んだB！C！助けてくれ！と

そして凄い力で右腕を掴まれた。その瞬間

B「おいA何してるんだよ」

Bの声が聞こえた瞬間。そいつの気配は無くなってしまった。そう思ったら全身の力が抜けて俺がその場で倒れてしまった。

B「おいA！どうしたんだよ！」

C「A君！どうしたの？」

## 空き家4

---

俺はすぐに救急車に運ばれて目覚めたら病院のベットだった。

B「A！目覚めてよかったよ、いきなり倒れたからビックリしたぞ」

C「ほんとよ、2階に突っ立てて私たちが声かけた瞬間に倒れちゃうんだもん」

A「悪い。ホっとして……………」

その瞬間あの時の出来事を思い出した

A「おい！俺の横に誰かいなかったか？」

B「誰もいなかったぞ？誰かいたのか？」

C「私も誰も見てないけど……………」

俺はホットした。あの出来事というのは倒れてからのもので、夢だったのか

それにしてもリアルな夢だったな。そう思うと急に喉が乾いてきた。

右にある水を取ろうとしたその瞬間

A「イテ！何だ……………」

服をめくり上げると俺達は言葉を失った

そこには、はっきりと人の手形が残っていたのだ。

あれは夢じゃなかった！って事はあれは……………」

そう思うと震えが止まらなくなった。BとCが傍にいてくれて看病してくれたが

それより恐怖で頭が一杯になってしまった。

退院して看病してくれたBとCには本当に感謝した。この二人がいなければ俺は今頃どうなっていたのか解らないからだ。

俺達はそれ以来、心霊スポットには行かない事にした。心霊スポットには絶対に近寄ってはいけない。

それが遊びなら尚更だ。もし遊びで近づくような事をすれば俺みたいな恐怖にあうかも知れない

。

この話を聞いてもなお、行きたいという人がいれば行けば良い。

そしてあなたは本当の'恐怖'を知ることになるだろう。



～あとかき～

最後まで読んで頂きありがとうございます。心霊スポットというのは本当に怖い所で近寄ってはいけないんだよという意味も込めて書かせて頂きました。この3人は'好奇心'で行ってしまったばかりに恐怖を覚えてしまったのですね。

霊というと存在を否定する人と、否定しない人に分かれてますが、私は存在すると思います。日本では'悪霊'海外では'悪魔'と言いますが、それぞれの言い方は違っても'霊'には違いありません。皆さんも好奇心で心霊スポットなどには行かないようにしてくださいね。